

チベット・アムド地域における「ツォワ」の現状と考察 ——青海省貴徳県 S 村の事例を中心に——

ガザン

(金沢大学人間社会環境研究科 博士後期課程)

「ツォワ」は骨と血で結ばれた家族と親族間の繋がりによる伝統的社会集団の名称であり、チベット古代史料上で「ツォワ」の語彙と似ている言葉は多く記されている。例えば、rigs, gdung, rus などである。何れも多くの史料に「ツォワ」と一括して混用している例は見られるが、それに対して R.A. スタンが指摘したように rigs は家族又は族・類、gdung は家系、rus は氏族である。その中の rus は rus chen bzhi, rus rgyud tsho ba などの呼び名も存在し、『娘氏宗教源流』の記載のように、いわゆるチベットのセ、ム、ドン、トンという 4 氏族に由来する。然し、アムド地域の「ツォワ」は rigs と gdung の意味に近く、1950 年代以前、血縁的な家系により構成されたが、1950 年代以降の一連の政策の影響や世帯の増加などの原因で緩やかな状態になった。1980 年代の宗教回復運動以降、再びツォワごとで年に一度の「ジェソン（公・守）」儀礼を復活してツォワの団結も強くなったと考える。

発表者は、これまで 4 回にわたって、人類学的フィールドワークにより、「ツォワ」の実態と構成、年に一度の「ジェソン」儀礼の中心内容であるボン教のクンザン曼荼羅及び護摩儀式、半僧半俗の宗教者による曼荼羅の製作過程などの儀礼行為の参与観察を行った。

本発表では、①文献資料に基づいて、「ツォワ」は rigs と gdung の意味に近いと主張し、②「ジェソン」儀礼を通じて、「ツォワ」の現状と役割、儀礼に見られる機能と相互関係を明らかにする。そして、③宗教回復運動以降の「ツォワ」の再構成について考察する。

近世チベット法律冊子(khrim yig)の先後関係および運用について

手塚利彰

(佛教大学総合研究所特別研究員)

本発表は、2003 年の論考に引き続き、刑事・民事分野の法規を主として集録したガンデンポタン期（1642-1959）成立の法律冊子(khrim yig)10 種を分析の対象とする。

これらの冊子には以下のような特徴がある。

- (1) 全て写本(手抄本)であり、版本は見当たらず、内容・構成が一致するものが 1 点もない。
- (2) 各冊子に集録されている zhel lce 法典には、
 - (a)パクモドゥバ政権(14~17C)、ツァンパ政権(16~17C)などの旧政権の法典としての体裁を完全に備えているもの
 - (b)旧政権の法典としての一部語句・節を削除・修正したもの
 - (c)ダライラマ政権(1642-1959)の法典としての前文を持つものなどがある。
- (3) zhel lce 法典の(c)タイプの前文の成立は 1653~54 年頃と思われるが、(a)・(b)タイプを集録する冊子の中には、(c)タイプを集録する冊子よりも後に成立したと思しきものがある。

本発表では、各冊子の先後関係を考証するとともに、一部冊子に旧政権の法典としての体裁を持つ法典が集録されている意味・意義、法律としての運用などについて考察する。

十二教母 (bsTan ma bcu gnyis) の起源とその変遷

石川巖

(中村元東方研究所専任研究員)

C. Cantwell と R. Mayer がすでに指摘したことではあるが、10 世紀に書写されたと見られる敦煌チベット語文献 Pt. 307 には、Padmasambhava とその弟子 Rlang dPal gyi seng ge が調伏したとする七人の護法の女神に関する図象学的記述があり、それは後代文献において二人が調伏たとされる十二教母に対応する。女神の数に相違はあるが、Pt. 307 に挙げられた女神の名やその異称から後代文献の十二教母の名が生まれたことは、両氏が述べるように、Nebesky-Wojkowitz の Oracle and Demon of Tibet に記載された十二教母の諸リストを参照すれば、すぐ察知できることではある。しかし、管見の限りにおいて、Pt. 307 の当該記事と後代文献の十二教母とを実際具体的に対照してみる試みは未だなされていない。本研究発表では Pt. 307 の七人の女神と、十二教母に関する一般的な図象学的叙述、さらに 14 世紀後半から 15 世紀初頭に「発見」されたニンマ派埋蔵本の儀礼文献、Thun mong rten 'brel sgrig byed pa'i lha nams mnyes byed bsang yig に見える十二教母に関する図象学的叙述とを比較して具体的な異動を観察し、10 世紀の初期ニンマ派から中世のニンマ派そして現代一般までの同護法神に対する描写変化の推移を見る。女神の名や称号などの固有名詞はよく存続しているが、それぞれに帰属する体色、衣装、乗り物などについて対応が見出されるのは珍しい。時代状況の要請によりそれらの女神の属性は大きく変わりつつも、その固有名詞だけは唱え続けられ遙か後代まで伝えられていったということかもしれない。

ツォンカパ中観思想における「戲論」の位置付け

ラモ・ジョマ

(大谷大学大学院博士課程)

本発表では、ツォンカパの著作である『中論註：正理大海』における「戲論」の用例を分析し、彼の中観思想の中での「戲論」の位置づけを明らかにすることを目的とする。

「戲論」はナーガールジュナの『中論』で重要な意味をもって用いられている。そのため、古来、多くの研究がなされてきた。だいたい「概念化作用」などと解釈されることが多い。それに対して近年松本史朗氏はツォンカパの『中論註：正理大海』を参照して、「戲論」は単なる言葉や概念の意味ではなく、諸法に自性があると捉える「真実執着」を意味していると指摘した。しかし、松本氏の研究は、ツォンカパの中観思想全体の中で戲論が他の概念とどのような関係にあるかまで踏み込んだものではない。

ツォンカパの独立の著作『菩提道次第大論』と『了義未了義の区別：善説心髓』とでは、「戲論」という語は「離戲論」という表現で何度か言及されるだけで、特に議論がなされることはない。

一方、『中論註：正理大海』と『入中論釈：密意解明』とでは、様々な修飾語を付けて戯論に言及している。すなわち、「真実把握の戯論 (bden 'dzin gyi spros pa)」、「世俗の戯論 (kun rdzob kyi spros pa)」、「二つの現れの戯論 (gnyis snang gi spros pa)」、「真実として思い込む戯論 (bden par zhen pa'i spros pa)」、「迷乱した現われの戯論 ('khrul snang gi spros pa)」、「妄分別の戯論 (rnam rtog gi spros pa)」と言った表現が見られる。これらの用例のコンテキストを分析して、ツォンカパがどのような意味で「戯論」という言葉を使っているか、そしてそれが彼の中観思想の体系の中でどのように位置付けられるかを探っていきたい。そのことによって、従来のインド文献のみに基づく戯論の理解に対して、別の解釈が可能であることを示したい。

チャパ・チューキセンゲの刹那滅論証理解
 ——*Pramāṇaviniścaya*に対する註釈を中心に——

崔 境眞
 (国際仏教学大学院大学特任研究員)

「不依存の論証因」(Itos med kyi rtags)と「拒斥する論証因」(gnod pa can gyi rtags)は、諸法の刹那滅性を自性因(svabhāvahetu)を用いて論証するために、*Pramāṇaviniścaya*やその他の自著においてダルマキールティが展開した論証内容に由来する術語である。インド仏教論理学では「不依存性」(nirapekṣatva)や「反所証拒斥論証」(sādhyaviparyaye bādhakapramāṇam)をキーワードとする論証で知られているが、チベット人たちはその各々に対応するものとして「不依存の論証因」と「拒斥する論証因」という術語をもって議論を発展させてきた。しかし、この二つの論証法の関係とそれぞれの役割については、チベット人論師たちの間でも異論が見られており、カダム派からゲルク派の時代までの間に思想史が成り立つに至っている。

本発表で取り上げるカダム派の論理学思想を完成させた人物として著名なチャパ・チューキセンゲ(1109-1169)は、*Pramāṇaviniścaya*についても註釈を著しており、近年『カダム全集』の刊行により参照することが可能になった。しかしその内容の難解さのためにチャパの思想的な特徴については今後もさらなる研究成果の報告が求められている実情である。本発表では、チャパの*Pramāṇaviniścaya*に対する註釈に基づいて、彼の刹那滅論証理解を明らかにし、極一部ではあるがチャパという人物の思想体系の一端を示すことを目標とする。

ゴク・ロデンシェーラップ著『五巻本の解説』(*Bam po lnga pa'i bshad pa*)の構成

石田尚敬
 (愛知学院大学講師)

近年、『カダム全集』の出版により、大翻訳官として知られたゴク・ロデンシェーラップの著作数点が新たに参照可能となった。本発表で取り上げる『五巻本の解説』(*Bam po lnga pa'i bshad pa*)は、『カダム全集』の编者により、『知識論決択要義』(*Tshad ma rnam nges kyi bsdu don*)の

名で、ダルマキールティ著『知識論決択』の要約として出版されたが、パスカル・ユーゴン博士、加納和雄博士、西沢史仁博士らが指摘するように、ダルマキールティ著『正理一滴』

(*Nyāyabindu, Rigs pa'i thigs pa*) へのダルモータラの注釈書である『正理一滴註』

(*Nyāyabinduṭkā, Rigs pa'i thigs pa'i rgya cher 'grel pa*) に対する注釈書(複註)と考えられる。奥書には、『五巻本の解説』(*Bam po lnga pa'i bshad pa*)と記されるが、その書名は、加納和雄博士によって、『*Rigs thigs 'grel pa dang bcas pa'i bsdu don*』と推定されている。本発表では、同書の解読研究の試みとして、その構成と注釈書としての特色を論じることとしたい。特に、分量としては必ずしも多くはない、『五巻本の解説』におけるダルモータラ著『正理一滴註』からの引用箇所を網羅的に分析することで、ロデンシェーラップの『正理一滴註』の位置づけについて考察したい。